

# 六朝の文学用語に関する一考察

——「隸事」をめぐる——

福井佳夫

## 一 隸事とはなにか

本稿は、六朝の文学用語のひとつ、「隸事<sup>れいじ</sup>」について、その実体や文学史上での意義をかんがえようとするものである。

この「隸事」という奇妙な語、いったいどういう意味か。鈴木虎雄『駢文史序説』（研文出版 二〇〇七）は、修辭技巧の典故を説明した箇所<sup>1</sup>で、このことばに言及し、つぎのよう

うにのべている（一二七―一二八頁）。

典故とは「古典に存する言・事」をいふ。支那の学者は、言・事を共に「用典」などといひ、二字合して一義の如く使用すると雖も、「典」は「古典に存する言」をいひ、

「故」は「古典に存する事」をいふものとして之を区別するを宜しとなす。以下、古典に存する言を「古言」といひ、古典に存する事を「故事」と称すべし。故事を使用することを又、「隸事」などと称す。（隸とは奴隸として使役する意）

この説明によると、「隸事」は「故事を奴隸として使役する 故事を使用する」の意であり、詩文中で故事をつかうことをさすらしい<sup>2</sup>。訓読すれば、「事を隸<sup>しか</sup>わす」だろう。

ただ私見によれば、この説明は、近現代の文学評論の分野では適切だが、このことばが発生した六朝においては、ふさわしくない。六朝ではこれとはちがう意味で、使用されていたからだ。それは、ある事物に関連した故事を列挙し、その

多寡<sup>たか</sup>をきそつあそび、つまり一種のものしり競争（あるいは、それをおこなつ）、の意である。つまり、隸事を「故事を使用する」の意でつかうのは、後代のことであり、六朝のころは、故事を列挙するあそびの意だったのだ。したがって本稿でも、この語を「ものしり競争」をおこなつ、「」の意で使用することによつ。

では、この隸事の語は、いつどうやってうまれたのか。それは、はっきりしている。斉の政治家であり、学者でもあった王儉（四五二―四八九）が、とあるあそびをおもいつき、それから、この語は発生したのである。

王諶の叔父の王摛<sup>おうち</sup>は、博学で有名だった。

尚書令の王儉は、かつて才学の士をあつめた。そして虚実さまざまの「書物中の」故事を検討して、各事物を類別し、その「類別した」語のもとに関連する故事をならべさせ、これを隸事と称した。隸事は、これからはじまったのである。

王儉はあるとき、賓客たちにこの隸事をさせ、故事をたくさんおもいついた者に、賞をとらせることにした。

「隸事が進行して」みな故事をおもいつかなくなったが、

廬江の何憲だけはおもいつけたので、勝ちとなった。そこで王儉は彼に、五花「模様の」の座ぶとんや白扇をあてたのである。何憲は「拝領した」座ぶとんにすわつて白扇を手にもち、はなはだ得意そつであつた。

そこへ王摛がおくれてやつてきた。王儉は提示された故事「をしるした紙片」を王摛にしめし、「そなたは何憲が手にした座ぶとんや白扇をうばいとれるかな」といった。王摛は筆をとるや、いつきに「あらたな」故事をかいた。その文は深奥で、行文も華麗なものだったので、一座の者はみな激賞した。そこで王摛は、左右の者に命じて何憲の座ぶとんをぬぎとらせ、みずから「何憲が手にしていた」白扇をうばいとつた。そして馬車にのつてかえつていった。

王儉はわらつていった。「莊子大宗師の」大力の者が背おつて、かえつていった、というやつじやな」と。

諶從叔摛、以博学見知。尚書令王儉嘗集才学之士、総校虚実、類物隸之、謂之隸事、自此始也。儉嘗使賓客隸事、多者賞之。事皆窮、唯廬江何憲為勝。乃賞以五花簾、白团扇。坐簾執扇、容氣甚自得。摛後至、儉以

所隸示之、曰、「卿能奪之乎」。摘操筆便成、文章既奧、  
辞亦華美、拳坐擊賞。摘乃命左右抽憲簞、手自掣取扇、  
登車而去。俚笑曰、「所謂大力者負之而趨。」（『南史』  
卷四九）

これが隸事、すなわちものしり競争がはじまった由来である。

右の文のうち、「総校虚実、類物隸之」二句が、隸事のじつ  
さいを説明したものだろう。しかしこの二句、語句が抽象的  
で、意味がとりにくい。私は、この二句を「虚実を総校し、  
物を類して之を隸わしむ」と訓じて、右のように訳してみた  
が、この訳文でよかったのか、いささかこころもとなない。以  
下、私の読解について、多少の解説をくわえておこう。

この二句のうち、まず下句「類物隸之」は、具体的にどう  
することをいうのか。私は、「事物を類別し、その類別した  
語のもとに関連する故事をならべる」の意だと解した。

たとえば、「天」であつたら、天の概念が包含する範囲を  
規定して（たとえば、日月や雷、霧などは「天」にふくめる  
が、寒暑や空、気などは除外するなど）、他の事物とわかち  
そのうえで天関連の故事を提示する。つぎに「地」であつた

ら、地の概念が包含する範囲を規定して、他の事物とわかち、  
そのうえで地関連の故事を提示する。つまり、ある語がさす  
範囲をきちんと規定し（類物）、そのち関連した故事を列  
挙してゆく（隸之）——これが、「類物隸之」の具体的な内容  
だろつと解した。

上句「総校虚実」のほうは、それ以前のプロセスをさすの  
だろつ。つまり、参加者全員で虚実さまざまの「書物中の」  
故事の真偽を検討する、具体的には書物を点検して、信頼で  
きるものを選択しておく（信頼できぬ書物や資料を除外する）  
作業をさすとかんがえる。したがって、「総校」は検討する、  
「虚実」は書物や「そのなかにふくまれる」故事の真偽、の  
意と解するわけだ。以上が、私なりの二句の理解である。

ところで、かくみてくると、この二句「総校虚実、類物隸  
之」の段階は、あそびというより、むしろ、故事の勉強会の  
ごとき、学問的色彩をおびた集まりだったろつと推測される  
（その意味では、類書の編纂作業にもちかかったろつ）。だか  
らこそ、そこにつづつひとは、才学の土ばかりだったわけだ。  
当初は、そうした故事勉強会ふうの作業を、隸事とよんでい  
たのだろつ。

ところがこの作業は、すぐあそびに変化してしまった。王儉は、こうした作業をくりかえすうち、隸事は勉強になるだけでなく、たのしいあそびにもなりそうだと気づいたのである。

そこであるとき王儉は、「天」や「地」などの事物を、賓客たち（みな才学の士である）に順に出題し、しるところの故事をあげさせた。具体的には、「天」や「地」などかいたボードを各所にかかげ、その下に故事をかきつけた紙片（記名）をならべさせたのではないか。そして故事をもっともおおく提示した者を勝者とし、賞品をあたえたのである。

## 二一 ものしり競争

この時点、つまり王儉が賞品をあたえた時点で、隸事は故事の勉強会から、あそび（ものしり競争）へ変化したといつてよい。そして六朝では、「勉強会でなく」このあそびとしての隸事が、ひろまっていったのだらう。つまり隸事は、「故事勉強会 ものしり競争（以上、六朝） 故事を使用する（後代）」と変化したわけだ。

もつひとつ、隸事に関する話柄をあげよう。

王儉は、学士の何恵らをおつめ、さかんに故事の多寡をきそつていた。陸澄は、王儉らが故事をだしつくすのをまち、そのあとで、もれおちた故事数百十条をかたつた。それは、だれもしらぬ話柄だったので、王儉らは、すっかり敬服したのだつた。

王儉は尚書省において、巾箱や几案のなかから、服飾の類をとりだした。そして学士たちに隸事をさせ、故事をたくさん提示した者に、それをあたえた。学士らはそれぞれ、一二の品を手にいれた。ところが陸澄がおくれやってくるや、みながしらぬ故事を、各事物に対し数条ずつ提出したのである。そして学士らがもっていた品をつばつて、かえつていったのだつた。

「王」儉集学士何恵等、盛自商略。「陸」澄待儉語畢、然後談所遺漏数百十條。皆儉所未覩、儉乃歎服。儉在尚書省出巾箱几案雜服飾、令学士隸事、事多者与之。人人各得一兩物。澄後來、更出諸人所不知事、復各數條、并旧物奪將去。（『南史』卷四八）

この話でも、王儉が中心となつて、隸事をおこなっている。

彼自身、博学で大の読書好きだったし、また朝廷の高官（尚書令）でもあったので、おのずから領袖的立場にいたのだらう。ここでは、陸澄という学者が、隸事の勝者となつてゐる。賞品の服飾の類などは、たいして価値のあるものではない。ただ、それを手にいれることが、当時ではたいへん名誉だったのであり、だから史書にも、かく記述されたのだらう。

このものしり競争、たしかにおもしろそうだ。右の二話をもとに、いささか想像をくわえながら、隸事のようすを具体的に再現してみよう。

会場は、王儉が令をつとめる尚書省の一室。あつまつた参加者は十人ぐらしか。みな、すこし緊張きみである。会場の隅や端には、おおぜいの観客、つまり親族や門生たちもあつまつてゐる。さっそく隸事がはじまつた。

まず、審査委員長の王儉が中央にでて、この日のお題を発表する。このお題をきくや、参加者は、さつと筆と紙片を手にとつた。

みな、最初はサラサラと調子よく故事をかきつけていた。が、やがて囊中の蘊蓄がつかたのだらう、ウンウン

と苦吟しながら、紙片をにぎりしめるだけ。それをじつとみつめる観客たち。声援をおくるのは禁止だ。やがて全員が完了のサインをだし、隸事がおつた。

だが、会場が熱気をおびるのは、これからだ。

まず、王儉が審査委員をしたがえて、中央にでてきた。審査がはじまつたのである。参加者や観客のまえで、審査員全員で紙片を点検してゆく。だが、どんな故事を、いくつかきつけたのか。王儉たちは、いちいち紙片をひるげ、かかれた故事を慎重に確認し、点検してゆく。ときに協議のうえ、ボツになつた紙片もある。はらはらどきどき、そしてわくわく。審査員が一挙し一動するごとに、観客たちの熱気や興奮は、いやましてゆく……。やがて審査がおつた。結果の発表だ。ざわざわしていた会場内が、一瞬しずまりかえる。王儉の口から、勝者の名がつけられた。わきおこる歓声、ため息、そして賛美の声。

そして彼が提示した故事が、いちいちよみあげられる。その勝者はなんと、百奈あまりの故事をかいたという。やがて読みあげがおつた。すると勝者のまわりに、大

勢の観客がつめかけた。おめでとう、すごいぞ、ばんざい——。

これが、架空の隸事のようなようすである。すこし演出がすぎたかもしれない。とはいえ、規模の大小こそちがってても、当時、これと同種の悲喜や興奮が、くりかえされたのではないか。かくして、賓客や才学の士たちはもちろん、その取りまきたちも、この隸事に熱狂するようになり、やがて何憲や王擢、陸澄のようなものしりが、名声を博するようになったのだから。

王儉がはじめた隸事のおそびは、彼の死後も、六朝文人たちのあいだで流行していった。彼のあとをついで、隸事のブームになったのが、かの梁武帝であった。

武帝はいつも周辺に文人をあつめて、経史に関する問題を課していた。范雲や沈約らはみな、主君の苦手な分野をださず、得意の分野を話題にしたので、帝はよろこび、ほうびをあたえていた。

たまたま帝が錦被を出題したところ、みな「もうこれ以上はおもいだせません」とこたえた。そこで帝は、劉孝標をよんでたずねてみた。孝標はそのとき貧窮し、無

官の身だったので、紙筆をもとめるや、「錦被に関する」記事を十余条もかきつけた。これに座中の客人はおどろき、帝もおもわず顔色をかえたのだった。

武帝はこのことから劉孝標をきらうようになり、ふたたび引見しなかつた。

武帝每集文士策経史事。時范雲、沈約之徒皆引短推長、帝乃悅、加其賞賚。会策錦被事、咸言已罄。帝試呼問「劉」峻、峻時貧悴冗散、忽請紙筆、疏十余事、坐客皆驚、帝不覺失色。自是惡之、不復引見。（『南史』卷四九）

この話をよむと、梁武帝は隸事のおそびを主催し、出題するだけでなく、自分でもこれに参加し、知識の多寡をきそつていたようだ（ただし、ここでは「隸事」の語はつかっていない）。范雲や沈約は、おとなの態度でもって、武帝に勝ちをゆずっていた。だが、貧寒にくるしんでいた劉孝標は、そうした余裕ある態度をとることができず、武帝に恥をかかせてしまった。そのため、彼は武帝の不興をかかってしまい、二度と引見してもらえなくなってしまうたのである。こうしてみると、隸事は、たんなるおそびではなく、そのひとの名声

や立身にも、かかわってくるようなビッグイベントだったの  
だろう。

それにしても、こうした武帝の熱中ぶりは、現在の時点か  
らみると、いささかおとなげないほどだ。この隸事のあそび、  
名君たる武帝をして、これほど夢中にさせてしまっほどの、  
おもしろさを有していたのである。知識の博大さをきそつた  
当時では、この隸事で勝者になることは、「天子でさえ」た  
いへんうれしく、また名誉なことだったのだろう。

この種の話柄は、ほかにも存するが、拳例はここまでにし  
よう。こうした故事の数をきそい、ものしりを自慢する当時  
の風潮については、中国の何詩海『齊梁文人隸事的文化考察』  
〔「文学遺産」二〇〇五 四。のち大幅に増補して、同氏『漢  
魏六朝文体与文化研究』北京大學出版社 二〇一 一 に収  
録〕が関係資料を網羅して、たいへんくわしい。私も本稿を  
草するにさいし、この何氏の詳細な考察に多大の便宜をこう  
むっている。

### 三 典故から詩句へ

こうした隸事の流行は、背景に、詩文における典故（古言  
+ 故事）多用の風潮があることはいうまでもない。典故多用  
の風潮については、たとえば梁の鍾嶸が、

顔延之と謝莊は、煩雑な典故技法を駆使し、当時の文人  
はそれに影響されてしまった。その結果、宋の大明（四  
五七〜四六四）と泰始（四六五〜四七二）のころは、詩  
歌は他の書物からの抜きがき同然になった。最近では任  
昉や王融らが、表現に獨創性をたつとばずに、新奇な典  
故をきそいあつたため、以来、文人たちのあいだでは、  
その風がならわしとなってしまった。

顔延謝莊、尤無繁密、於時化之。故大明泰始中、文章  
殆同書抄。近任昉王元長等、辞不貴奇、競須新事。爾  
來作者、寢以成俗。

とかたるとおりである（『詩品』中序）。つまり鍾嶸からみれ  
ば、詩文は、典故を多用した結果、他の書物からの抜きがき  
同然のものとなってしまったのだ。かく「鍾嶸らの」一

部の文人から批判をうけながらも、それでも顔延之や謝莊、任昉、王融らは、絢爛な典故技巧を駆使することによって、詩名をたかめていったのである。

ところで、かく詩文に典故を使用するためには、たくさん  
の書物をよんで知識、具体的には故事や掌故を頭脳にたくわ  
えておかねばならない。当時は、文会場で詩を応酬しあつ  
ていたので、自宅にかえつて書物をめくるようではラチがあ  
かない。そのときその場で、すぐ典故をおもいうかべ、それ  
をサツと詩句に変換（あるいは詩中に象嵌）せねばならない  
のだ。その意味で隸事と詩作とは、典故使用を媒介として、  
ふかい関係を有していたのである（そのため後代では、詩中  
で典故をつかうことを隸事と称するようになった）。

そうした風潮のなかでは、右でみた王摛や陸澄らこそ、そ  
の該博な故事の知識によって典故多用の詩をつくり、すばら  
しい詩人だとたたえられたろう、とおもいがちだ。ところが、  
周知のようにこの兩名は、詩人としては無名のままおわつて  
しまった。故事にくわしい隸事の勝者だったのに、この二人  
はなぜ詩人として、大成できなかったのだろうか。

それは、隸事が得意だった（故事掌故にくわしい）という

ことと、詩文の名手だということとは、直にはつながらない  
からである。ここで、右に例示した隸事の場面を、もういち  
どみてみよう。すると、

「陸」澄は「王」俛らの語り畢るを待ち、然る後に遺漏  
せし所数百十條を談せり。皆な俛らの未だ覩ざる所なれ  
ば、俛らは乃ち歎服せり。

「王」摛は筆を操るや便ち、「事」を「成」し、文章は既に奥  
辞も亦た華美なれば、坐を挙げて撃賞せり。

「劉」峻は時に貧悴冗散なれば、忽ち紙筆を請い、十餘  
事を疏す、坐客は皆な驚き、帝も覚えず色を失う。

というものだ。陸澄は口頭で「談」じたのであり、王摛は即  
座に「便ち成」し、劉峻も「疏」（箇条がき）したというこ  
とに留意しよう。つまり彼らは、隸事の場でサツとおもいつ  
いて、しゃべったり、かいたりしたただけなのだ。いわば、メ  
モのような断片的な書きつけにすぎず、陸澄にいたっては口  
頭の発言であり、そのメモさえもなかったのである。

これでわかるように、彼らは、故事や掌故を想起しただけ  
であり、詩をつくったわけではない。じっさいに詩をつくる  
うとすれば、故事を「談」じたり「疏」したりしたあと、さ

らにそれらを精練させ、象嵌させて、詩句を鑄造してゆかねばならない。じつはこの「典故 詩句」の精練が、困難なのである。

そこで、この困難な精練のプロセスを、すこしだけ擬似体験してみよう。材料としては、さきに鍾嶸が典故多用の詩人として挙例していた宋の顔延之、彼の「詔に應じて曲水に讌せしときに作りし詩」をとりあげよう。  
 (詔に應じて曲水に讌せしときに作りし詩) をとりあげよう。  
 この詩は、元嘉十一年(四三四)に曲水宴が挙行されたとき、宋文帝は臣下に作詩を命じた。その詔に應じて延之がつくったのが、この四言の詩である。ここでは、その冒頭の二句だけをみてみよう。

大道は未形のなかにかくれひそみ

平和は戦乱のあとに真価がわかる

道隱未形  
治彰既乱

この二句は、それぞれ典故をふまえて鑄造されている。では、どうした典故をふまえているのか。さいわいなことに、顔延之が脳裏にうかべていた「とおもわれる」古言や故事が、初唐の季善によって注釈というかたちで、あきらかにされている(『文選』巻二〇)。それによって、この二句の典故をあげてみよう。

道隱未形(道は未だ形るるに隱る)

老子曰、「大象無形」。又曰、「道隱、無名」。王弼曰、「有形則亦有分、有分者不温則涼、故象者非大象也」。又曰、「天道、物以之成而不見形、故隱、而無名也」。河上公曰、「道、潜隱、使人無能名也」。

治彰既乱(治は既に乱るるに彰る)

太玄経曰、「乱、不極則治、不形」。賈逵国語注曰、「彰、著也」。

これが、季善が指摘する典故である(詩句とおなじ字句が、注の文にあれば、その字に傍点を付しておいた)。顔延之はこうした典故を脳裏に想起しつつ、「道隱」二句を鑄造したのでろう。

典故の字句と、できあがった詩句とをくらべると、かなり相違しているのに気づく。顔延之は単純に、典故を接合させたのではない。典故の字句を分解し、きりとり、くみかえているし、字句の構造も変化させている。つまり、彼なりに材料(典故)に手をくわえ、精練させて、詩句を鑄造しているのである。

まず、下句「治彰既乱」(治は既に乱るるに彰る)のほう

からみてみよう。ここで顔延之は、「太玄経」の「乱不極則治不形」（乱極まらざれば則ち治は形れず）という「レバ則」の構文を、詩では「Aは……にBする」（治は……に彰る）の構造にかえている。これは、そうとうおおきな組みかえであり、凡庸な詩人ではなしえぬ変更だといわねばならない。さらに詩中の「彰」字は、典故によれば「形」字にすべきだったはずだ。だが延之は、たぶん鍊字の技巧を意識して、平凡な「形」をさけて「彰」にかえたのだろう。

つづいて上句にかえり、「道隱未形」をみてみよう。この句も典故の字句に、そうとう精練をくわえている。この詩句は、『老子』の「道隱無名」（道は隠れて名無し）をもちいたものだが、出典の「道隱」は、もとは「AはBする」の構造だった。だが、下句の「治彰既乱」（治は既に乱るるに彰る）の構造と対応させるため、顔延之はあえて、これを「道隱未形」（道は未だ形るるに隠る）と変形させ、「Aは……にBする」の構造にしたのである。そして「未形」は、おなじ『老子』に「大象無形」とあるのを利用したのだと、李善は指摘する。

以上、顔延之の詩を例にして、「典故 詩句」の精練、口

セ入をみてきた。これをみると、延之は、たんに典故の字句を接合させたのでなく、対偶や鍊字の技法を意識しながら、「道隱未形」⇨「治彰既乱」という二句に鑄造しなおしていた。両句とも、典故の文構造を変形させており、そうとう複雑な精練をへて造句しているといつてよい。

なぜ、こうした複雑な精練をほどこしたのか。それはしよせん、延之にたずねないとわからぬことだが、おそらく延之なりに、より美的なものにつくりかえよう（彼の脳裏には、たぶん「対偶＝美的」の意識があつたのだろう）としたからだろう。そうした意欲が、彼の才能であり、また美意識だったのである。

#### 四 陸公は書厨なり

さてここで隸事の勝者、王摛や陸澄らの話題にかえろう。この二人が得意だったのは、右の顔詩の例でいえば、『老子』や「太玄経」の典故を想起し、それを口頭で談じ、また紙にかきつけることだった。つまり典故を提示すること、ただそれだけだったのである。

これを詩にするには、顔延之がおこなったように、典故を精練し、詩中に象嵌させねばならない。ただ典故を接合させれば、すぐ詩句ができあがるものではない。一句の字数をととのえ（四言詩なら四言に、五言詩なら五言に）、二句ごとく押韻し、ときに対偶にし、また鍊字にも配慮せねばならない。

比喩的にいえば、王摛と陸澄ができたのは、原料たる鉄鉱石（典故）をみつけどすことだけだった。だが詩をつくるためには、それをいったん溶解炉（詩才）にとかして精練し、うつくしい器物（詩句）に鑄造しなおさねばならない。しかし二人は、知識の獲得には貪欲だったが、そうした詩句への精練はできなかつたようだ。じつさい彼らには、名作とたたえられる詩文はのこっていない。二人とも詩と賦は一篇もなく、ただ書翰や議などの文が、残存するだけにすぎない。

では、彼らがのこした文章は、どのようなものか。一篇だけ陸澄「上表自理」を例にあげ、その行文を概観してみよう。齊の建元元年（四七九）、沈憲という男の家奴や門客が、乱暴狼藉をはたらいたが、このとき御史中丞だった陸澄は、これをとりしまらなかつた。そこで左丞の任遐は、陸澄は職務

怠慢なので、免官すべきだとうつたえたのである。この訴えに対し、陸澄は表をたてまつって、奇妙な弁解をした。自分の職務怠慢にはふれず、「左丞の官にある者（任遐）が、御史中丞（陸澄）をうつたえてよい道理はない。だから任遐のうつたえは無効である」と主張したのである。

その「上表自理」のなかで陸澄は、得意の博大な知識をふるって過去の故事掌故を列挙し、自説のただしさを論証している。一節をあげれば、

……左丞の江奥は段景文を弾じ、又た裴方明を弾ず。左丞の甄法崇は蕭珍を弾じ、又た杜驥を弾じ、又た段国を弾じ、又た范文伯を弾ず。左丞の羊玄保は又た蕭汪を弾ず。左丞の殷景熙は張仲仁を弾ず。兼左丞の何承天は呂万齡を弾ず。並びて罪に帰せざるも、皆な重効たり。凡そ茲この十弾、差ほどんど是れ「沈」憲「沈」曠たくの比たぐいにして、悉く中丞の議に及ぶ無し。左丞の荀万秋、劉蔵、江謐は王僧朗、王雲之、陶宝度を弾ずれども、中丞に及ばず。最も是れ近き例の明らかなる者なり。

という文章である。「某甲は」だった。また「某乙も」だった。だから「である」というもので、いかにも陸澄がかきそうな

スタイルだ。いわゆる六朝美文ふうの、華麗な文章スタイルではない。つまり彼は、対偶や鍊字などの文飾はほどこさず、ただ故事掌故を列挙してゆくだけの文が得意だったのだろう。いや、もっとつよくいえば、そうした文しかつづれなかったのかもしれない<sup>2)</sup>。

かくかんがえてくれば、やはり二人は、詩賦をつくる才能がとほしかった、と評されてもやむをえないようだ。

もし弁護しようとするれば、二人は詩賦をつくれたし、じつさいつくったが、運わるくほろんでしまったとか、詩賦をつくる能力は有していたが、偏屈な性格だったので文会に参加できなかった——などといえなくもない。だが、前者については、かりにつくったとしても、後世につたわるほどの名篇でなかった「ので淘汰されてしまった」というべきだろうし、後者についても、二人とも隸事に参加していたのだから、社交性はそれなりにあったとかんがえるべきである。詩文が残存せぬのは、やはり才能がなかったからだろう。

二人のうち、陸澄にはつぎのような話のこっている。

陸澄は、当世で碩学と称された。だが、『易』を三年よんでも内容が理解できず、『宋書』をかこうとしたが

完成できなかった。だから王儉は冗談で、「陸澄どのは、書物の戸だなのようなひとだなあ」といつていた。

彼の自宅には古書がおおく、稀覯書もすくなくなかった。彼は地理書と雑伝を編纂していたが、それらは死後になってから世にでたのである。

澄当世称為碩学、読易三年不解文義、欲撰宋書竟不成。王儉戲之曰、「陸公、書厨也。」家多墳籍、人所罕見。撰地理書及雑伝、死後乃出。

これから見ると、陸澄が天からささった資質は、均等かつオールマイティなものではなく、かなりでこぼこがあったようだ。彼は記憶力がすぐれ、知識も豊富だったので、具体的で箇条ごとに叙してゆける、地理書や雑伝の類はつづることができた。だが抽象的思弁（『易』のことき思弁哲学）を解したり、大部な編纂物（『宋書』のような史書）を完成したりする能力には、とほしかったのだろう。そのため王儉から、「書厨」（書物の戸だな）と評されてしまったのだった<sup>3)</sup>。

これを要するに、隸事が得意だということは、ものしりであることの証明にはなりえる。しかし、詩人や文人としての卓越までは、保証してくれないのである。

## 五 物名詩の創作

ところで詩文、なかでも当時の流行していた五言詩の分野で、この隸事の才が応用できそうなのは、詠物詩や物名詩あたりだろう。

詠物詩（物を詠じる詩）とは、特定の事物をとりあげ、その特徴や風情を叙する詩である。題材としては、草木（たとえば梧桐、竹、薔薇、落梅など）や器物（たとえば席、簾、幔幕、琵琶など）をとりあげることが、おおかった。ただこの詩は、題材と真摯に対峙して、その本質を叙してゆくようなものではなく、文会で仲間ときそいあつてつくる、遊戯的なものだった。あそびの詩なので、気がきいたものでなければならぬ。そのため外面的な技巧を追求しがちであり、なかでも題材に関する典故を、詩中におりこむことがもとめられたのである。

いっぽう物名詩とは物の名、たとえば宮殿や草木の名を多数よみこんだ詩をいう。これも、やはり数人のひとによって、あそびで競作されることがおおかった。この詩では、事物の

名をよみこむことが主眼なので、典故はかならずしも必須ではない。しかし事物、たとえば個々の宮殿や草木には、それがつくられたいわれや、それにまつわる故事が付随するので、けつきよく典故ともふかい関係を有しがちなのである。

この詠物詩や物名詩では、関連した典故を列挙したり、同種の物の名をおりこんだりすればよい。主題をどう展開するかとが、一篇の構成をどうすべきかとが、そんなことはあまりかんがえず、故事掌故の知識を動員し、詩中にならべてゆけばよいのである。

なかでも物名詩の場合は、物の名を列挙してゆくだけなので（ただし、句形をととのえ、押韻する必要はある）、ものしり競争の勝者には好都合だ。いわば隸事のあそび、すなわち典故を列挙してゆく知的作業が、そのまま当該の詩の創作につながりやすいのである。陸澄が苦手とした抽象的思弁や構成力も、ここではあまり問題にならないだろう。

そうした、隸事のあそびをそのまま詩に昇華させた作として、物名詩の一篇をとりあげてみよう。これらの詩、作者の真情や個性はあまり関連しないので、だれの作でもよいのだが、ここでは蕭繹の作をとりあげてみよう。

梁の元帝ともよばれる蕭繹は、たいへんなものしりだった。十四歳で片目をうしなつたが、向学心はおとろえず、配下の者に書物を読誦させて、毎日それに耳をかたむけたという。その結果、博大な知識をものにし、おおくの著述をかきのこした。そうした元帝、詩文の方面では、ものしりだったこともあつて、この物名詩を得意にしていたようだ。じつさい、いまにのこる彼の集には、おおくの物名詩がふくまれている。たとえば、県名、姓名、將軍名、屋名、車名、船名、薬名、獣名、鳥名、樹名、草名などをおりこんだ詩である。

ここでは、そうした物名詩のなから、宮殿の名を列挙した「宮殿名詩」をしめそう。

杏樹のあいだで花はあかく色づき	杏間花欲燃
竹の道に露がはじめておりた	竹径露初圓
鶏を東道でたたかかせ	鬪雞東道上
馬を北場ではしらせる	走馬北場邊
合歡の花は夜の巷にさき	合歡依暝巷
蒲萄は陽光にむかつている	蒲萄向日鮮
旗亭にて張放の姿をさがしとめ	旗亭覓張放
香車で董賢どのをお迎える	香車迎董賢

きつと天淵の水に邪魔されて  
定隔天淵水  
相手を思慕して夜ねむられぬだろう  
相思夜不眠

陳志平・熊清元『蕭繹集校注』（上海古籍出版社 二〇一八）によれば、傍点を付した字句は、すべて宮殿の名であるという。意外におもわれるが、「鬪雞」や「蒲萄」「董賢」「相思」なども、宮殿や台觀の名なのである。これらの語は、「広義の」宮殿の名でありながら、詩中では、動詞や植物、人名としてもつかわれている。日本古典における掛詞のように、二重の意をかけて使用されているのである（面倒なので精確には訳さなかつたが、末句などは「相思観で相手を思慕して夜ねむられぬだろう」の意になるわけだ）。詩中で宮殿名の語を多用しようとするれば、こうした掛詞ふうにせざるをえないのだろう。

この詩中にふまえられた典故をあげれば、つぎのようなものだ。それは、

【鬪雞】曹植名都篇曰、「鬪雞東郊道、走馬長楸間」。  
【走馬北場】曹丕与朝歌令吳質書曰、「馳騁北場旅食南館」。  
【合歡】嵇康養生論曰、「合歡蠲忿萱草忘憂」。  
【蒲萄】漢書西域伝曰、「漢使采蒲陶、目宿種歸」。  
【旗亭】

張衡西都賦曰、「旗亭五重俯察百隧」。【張放】漢書張湯伝曰、「張」放為侍中郎將、監平樂屯兵、置莫府、儀比將軍。与上臥起、寵愛殊絶、常從為微行出游、北至甘泉、南至長楊、五禩、鬪雞走馬長安中、積数年」。【相思夜不眠】古詩十九首曰、「迢迢牽牛星、皎皎河漢女。織擢素手、札札弄機杼。終日不成章、泣涕零如雨。河漢清且淺、相去復幾許。盈盈一水間、脈脈不得語。」などである。これは、右の「校注」にもとづき、私が気づいた範囲で、すこしおぎなつたものである。おそらく、まだ落ちがあるだろう。

このように物（ここでは宮殿）の名をおりこみ、また典故を多用した詩が、物名詩なのである。この詩、宮殿名をおりこむのが目的なので、一篇の主題というべきものはとくになさそうだ。したがって全体の意味も、あまり判然としない。この詩でいえば、前半では曹兄弟や建安文人たちの風雅なあそびを、えがくようにみえる。だが後半になると、いきなり前漢の張放や董賢の典故があらわれる。そして末二句では、なぜか七夕の悲恋の物語が叙されているのである。これらの典故、相互にどういふ関係があり、どうした構想のもとに布

置されているのかは、よくわからない。

しかし、これは物名詩である以上、しかたがないといわねばならない。なにしろ、この種の詩は、書齋でじっくり構想したものでなく、文会で遊戯的かつ即興的につくつたものなのだ。宮殿名が出題され、その場で、関連する名称や故事掌故を想起し、それをさつと五言の句にまとめ、押韻させただけなのである。だから、これをつくつたときの蕭繹は、詩の主題とか構想などは脳裏になかつたろう。その意味で、この「宮殿名詩」は、五言詩というより、「物名をおりこんだ五言の韻文」といったほうがよいかもしいない。

物名詩は、こつしたものだ。隸事とおなじく、複数の人びとのあいだで、あそびでつくられるものである。脳裏にたくわえた知識を動員してつくるわけだから、隸事の勝者だった王摛や陸澄が詩をつくとすれば、こつしたあそびふうの詩が、もつともふさわしかっただろう。なかでも王摛は、故事を紙片にかきつけるや、「文章は既に奥にして、辞も亦た華美なり」だったという（前出）。とすれば、王摛などは、なおさらつくりやすかつたろうとおもわれる。

しかし王摛や陸澄には、なぜか、こつした詩ものこつてい

ない。物名詩では、ただ想起した典故を、五言にととのえ、押韻するだけでよいのである。そうしたものも残存しないというのは、彼らは、そうしたことすらできなかった（あるいは、しようとしなかった）のだろう。

そうだとすれば、いよいよもって詩才（あるいは、詩への関心）がなかったとしか、いいようがない。彼らは、溶解炉にとかすべき原料は豊富にもっていた。しかし、それを精錬し、つつくしい器物を鑄造する技術（あるいは、意欲）は、もっていなかったのである。

## 六 創作の三段階

では、王摛や陸澄は、具体的にどんな能力が不足していたのだろうか。いや、二人にかぎらず文学、なかでも詩賦をつくるには、そもそもどんな能力が必要なのだろうか。

そこで、かりに詩賦を創作する過程を三段階にわけ、この問題をかんがえてみよう。この三段階とは、構想をねる「じじいじいぶつにつくろじい」、骨ぐみをつくる「草稿をかいてみよう」、肉づけをする「典故や対偶で洗練させよう」

——の三つである。そしてこの各段階に、それぞれことなる能力が必要だと仮定してみよう。

では、当時の文人たちはこの各段階で、どんな能力をどんなふうにするって、詩賦をつくっていったのだろうか。そうしたことを、江淹「恨賦」の創作を例にかんがえてみよう。この「恨賦」も、やはり典故を列挙した作品である。それゆえ、物名詩と相似した作りかたをしたとおもわれ、いろいろと都合がよさそうだ。

この「恨賦」の序には、つぎのようにある。「私はもともと悲観的な人間だ。「ひとは死をまぬがれぬとおもう」と「心さわいでやむことがない。すると私は、わが想いは過去にとび、恨みをもって死んでいった古人のことを想起してしまうのだ」（於是僕本恨人、心驚不已。直念古者伏恨而死）。これからすると、悲観的な人間である自分（江淹）は、死の運命に心さわいでやまぬ。そこで恨みをもって死んでいった古人について、その運命をかんがえてみよう——という趣旨で、この「恨賦」をつくったようだ。では「恨賦」をつくるため、江淹はどんな作業をおこなったのか。右の三段階 になわけて、くわしくみていこう。

まず、構想「こういつふうにつくろつ」の段階において、江淹は、「物名詩をつくるのおなじく」恨みに関連した故事を列挙しよう。そしてそれによって「恨み」の情緒を喚起させよう——と構想したようだ。こうした構想は、結果的に成功をおさめた。「恨賦」は『文選』に採録されたし、また「話また一話と、ひとつずつ故事を叙してゆくやりかたは、読者を慷慨させ、また激昂させる。この文をよめば、英雄だつて涙をながすだろう」（至分段事叙、慷慨激昂、読之英雄雪涕）という好評も、博することができたのである（清の許槿）。許槿は、故事列挙がもたらす「読者を慷慨させ、また激昂させる」効果を、たかく評価したのでらう。

つぎの「骨ぐみ」草稿をかいてみよう」では、江淹は「恨み」の故事を捜求し、選択し、賦中にしきつらねた。だがそのさい、ランダムに布置するのではなく、「(1)秦の始皇帝、(2)戦国の趙王遷、(3)前漢武帝期の李陵、(4)前漢元帝期の王昭君、(5)後漢の馮衍、(6)晋の嵇康、(7)その他（孤臣・孽子・蘇武・婁敬・栄貴之子）」のように時代順にならべた。くわえて、古人の身分や階層にも配慮した。すなわち史書の構成とおなじで、『史記』ふうにいえば、(1)は天子の本紀、(2)は諸侯の

世家、そして③～⑦は個人の列伝というふうに分列したのである。つまり、上は天子から下は無名の士まで、すべての階層をきちんとカバーしているのだ。かく配列することによって、ひとの恨みの情たるや、特定の時代や階層に限定されるのではなく、普遍性をもった感情なのだ——とつたえようとしたのだらう。江淹は、こうした趣意を意識しながら、この賦の骨ぐみをつくつたのだと私はおもふ。

最後の「肉づけ」「典故や対偶で洗練させよう」こそ、江淹の得意とする段階である。そしてこれも、卓抜な成功をおさめた。たとえば、やはり清の許槿は、「行文は千錘百鍊されているが、鏤骨の痕跡を感じさせない」（語法俱自千錘百鍊中来、然却無痕迹）と評し、修辭的彫琢の卓絶ぶりをたたえているのだ。

賦中の修辭のうち、典故のくふうは顔延之の詩で紹介したので、ここでは対偶の巧緻さをしめそう。たとえば、嵇康が刑死する場面を叙した対偶、

夕べに濁り酒を手もとにひきよせ

朝がたに琴箏の調べをかなでた

濁醪夕引  
素琴晨張

は、「濁醪」⇔「素琴」と「夕引」⇔「晨張」とを対応させつつ、

嵇康の最期の一日を叙したものだ。「濁醪」は、「与山巨源絶交書」の「濁酒一盃、弹琴一曲なれば、志願は畢りぬ矣」に依拠し、「素琴」は「贈秀才入軍」詩の「習習たる谷風、我が素琴を吹く」によつたものだ。と季善は注する。ただこの対偶では、むしろ「夕べに引く」と「晨に張る」の対応が、刻々とせまりくる刑死の瞬間を暗示して、じつに巧妙かつ印象的である。嵇康はどんな想いで濁り酒をのみ、琴箏をかなでたのだろうか。その心中は、きつと恨みでいっぱいだったにちがいない——と江淹はいいたいのだろう。

もうひとつ、こんどは対偶と典故の両方にかかわるくふうをあげれば、

孤臣は涙をボロボロこぼし

庶子はびくびくとしている

孤臣危涕、  
孽子墜心

がそれだ。この対偶は、孤臣と庶子の不安な心中を叙したものである。季善によると、上句の「危涕」は、「孟子」尽心上の「孤臣と孽子は、其の操心たるや危し」、下句の「墜心」は、王粲「登楼賦」の「涕は横さまに墜ちて禁められず」をふまえる。すると傍点部は、典拠にしたがえば「危心」「墜涕」となるべきだが、江淹は奇抜な表現をこのんだので、故

意に字をいれかえて、「危心・墜涕 危涕・墜心」と改変したのだという。

以上、私見によりつつ、文学を創作する過程を三段階にわけ、それぞれの段階を「恨賦」によりつつ説明してきた。すばらしい詩賦をつくるには、この三つ、すなわち 構想をねり、骨ぐみをつくり、肉づけをする——の各段階において、それぞれ固有の能力が必要だったろうとおもわれる。

では、この三段階にしたがって、王摛と陸澄の能力をみてみよう。すると二人が有していたのは、骨ぐみをつくる段階の、しかもその「骨ぐみの」材料だけだったといつてよい。つまり彼らは、それ以前の 構想をねることもできず、また骨組みをつくることも、肉づけをすることも、やはりできなかつたのである。そうであれば、そもそもすばらしい詩賦など、つくれるはずがなかつたのだ。陸澄が「書物の戸だな」と評されたのも、その意味ではあたつていたといわねばならない。

このように、詩賦をつくるには、故事や掌故をしつていられるだけでは、ぜつたい不可能だといつてよい。や や をさつとこなしてゆく、かがやくような才能がなければならぬ。

六朝の人びとは、そうした才能を「五色の筆」や「五色の鳥」「錦」などに比擬した。著名な話をあげれば、『南史』巻五十九江淹伝におさめられる、つぎのような話柄がそれである。

江淹はわかひころは、文学で名を知られていたが、晩年になると文才がおとろえた。そこでつぎのように噂された。

江淹が宣城太守の任をやめて、「船で都に」かえる途中、禅靈寺の岸辺に一泊した。その夜、夢に張協（景陽）と名のる男があらわれ、「私は以前に一匹の錦にしほをあずけた。いま、それをかえしてほしい」といった。江淹が自分の懐中をさぐると、数尺の錦がでてきたので、それをかえた。するとその男、すくおこつて、「どうしてこんなにぎりとして、つかってしまったのか」といい、丘遅のほうをふりかえつて、「こんな数尺では役にたかないから、君にあげよう」といった。このうち、江淹の詩はおとろえた——と。

淹少以文章顯、晩節才思微退。云為、宣城太守時罷歸、始泊禅靈寺渚。夜夢一人自称張景陽、謂曰、「前以一匹錦相寄、今可見還」。淹探懷中得數尺与之。此人大

悲曰、「那得割截都尽」。顧見丘遲謂曰、「余此數尺既無所用、以遺君」。自爾淹文章蹟矣。

この話においては、「一匹の錦」が江淹の文学的才能を象徴している。ここでいう「錦」こそ、構想をねり、骨くみをつくり、肉づけをしてゆく、一連の能力をさすのだから。江淹は、「張協からあずかった」このかがやかしい「錦」をもっていた。だから彼は、すばらしい詩がかけたのだった。逆にいえば、この「錦」をもたぬ者は、いくらおおくの故事をしり知識がゆたかであっても、すばらしい文学作品はうみだせなかつたのである。<sup>5)</sup>

## 七 学者と詩人

だが、こうした構想や骨くみなどの話題は、隸事の勝者だった王摛や陸澄には、おそらく「能力があるとか、ないとかいう以前に」関心の外だったのだろう。どうしてか。彼らは、詩賦をつくる詩人ではなく、博覧強記をよしとする学者だったからである。

では、そもそも当時の学者とは、どのような人びとだった

のか。学者一般の例となるかどうかはわからないが、いままでものべてきた陸澄を例にして、当時の学者の人となりや世すぎのしかたをうかがってみよう。

陸澄の人となりをよくあらわすのは、さきに引用した隸事の話柄（『南史』巻四八）の直前にある記述である。そこには、つぎのような話が叙せられている。

王儉は、自分は博学のものしりで、読書量も陸澄よりおおい、とおもっていた。すると陸澄は、その王儉にいった。「わしは、わかい時分からなにもせず、ただ読書ばかりしてきた。かつ年歳も爵位も、たかくなつた。ところで、貴殿はわかいのに重職をりっぱにこなし、またいちど目をとおせば、どんな書類もそらんじられるそつな。じゃが読書量は、わしにはおよぶまい。」

儉自以博聞多識、読書過澄。澄謂曰、「僕少来無事、唯以読書為業。且年位已高。令君少便執掌王務、雖復一覽便諳、然見卷軸未必多僕」。

以下に、前出の「王儉は、学士の何憲らをあつめ」云々がつづくのである。右の話からみると、王儉と陸澄（四二五～四九四）とは、年齢こそへだたっているものの（陸澄が二十

七歳も年長）、知識の多寡をめぐって一種のライバル関係にあったようだ。そして隸事のリーダーシップに関しては、王儉が中心にあつて采配をふるっていたが、知識の多寡に関しては、陸澄のほうが一日の長を有していたようだ。

それにしてもこの話は、読書量や博覧ぶりに対する、陸澄のつよい自負をよくしめしている。彼はいう。「わしは、わかい時分からなにもせず、ただ読書ばかりしてきた」「読書量は、わしにはおよぶまい」と。つまり陸澄は、高官の「ただし歳わかい」王儉にむかつて、オレは読書量だけはまけんぞ、とタン力をきっているのだ。この発言、読書の多寡がすべてという発想で、年がいもない幼稚なことばだといえ、それはそのとおりだろう。だが逆にいえば、こんなことで、こんなふうにもキになる、鼻っぱしらのつよさが、陸澄ら学者の真骨頂だったのだろう。

こうした発言をするだけあつて、陸澄の官場生活は、あまり順調ではなかったようである。トラブルをおこして「白衣領職」（白衣もて職を領す）、すなわち庶民の地位におとされ、かつかつ官位だけ保持したという目に、二度もあっている。

かく死ぬまで圭角がとれず、世渡りがへただった彼の生涯

について、『南史』本伝の「論に曰く」は、

陸澄は、故事掌故にくわしいとたたえられたが、当今では有用な人物ではなかった。そもそも名劍の干将がおもんじられたのは、切れ味抜群だったためだった。だが陸澄の場合は、あまり時務に役だたなかったたので、「書物の戸だな」という「王儉の」評言は的を射たものだったといえよう。

陸澄学称博古、而用不合今。夫干将見重於時、貴其所以立断。於事未能周務、書厨得所譏矣。

と評している。これは、陸澄を名劍の干将と対比しつつ、当今に有用な人物ではなかったと、かなり辛口の評価をくだしたものである。けだし、こうした批評は、陸澄だけでなく、当時の学者一般にあてはまるものなだろう。

しかし、もし陸澄がこうした批評をきいたなら、つよい口調で抗議したのではないか。なにをいうか。詩才がなかったとか、時務に役だたなかったとかいうだけで、このわしが評価されてたまるものか。時務とか詩才とかいったって、けっきよくのところ、官位の上達をめざすものではないか。そんなことより、読書して前言往行をまなび、君子の道にちかづ

くことこそが、もつとたいせつなことではないのか、と。

陸澄ら、世渡りのうまくない学者は、ほかにもたくさんいたはずだ。そうした人びとの心理を分析すると、おそらくつぎのようなものだったろう。

この世は、「死生 命有り、富貴 天に在り」(『論語』顔淵)だ。死や生というものは、さだまった運命というものがあり、また富も立身も、天の配剤しだい。しよせん人間の力では、どうにもならぬものだ。だから自分は、ガツガツと長命や立身をもとめたりしない。詩賦をつくって立身をねらったり、時務につとめて高位を射とめたりするなど、そんなさもないことはしとうないし、する気もない。そんなことに熱中するより、聖人の道をまなび、徳をやしなつたほうが、はるかに価値があるはずだ――。

陸澄らの胸裏には、読書や博学をおもんじる、彼らなりの矜持があった。だから、読書や博学の上位に、詩賦創作や時務などがあって、自分はまだそれに到達していないなどとは、つゆおもっていなかったらう。日々こつこつと書物をよんでゆき、おおくの故事や掌故を脳裏にきざみこんでゆく。そして王儉らがひらく隸事の場で、おのが博識ぶりを披露し、他

メンバーから賛嘆される——それだけで、彼らはじゅうぶん満足だったのである。

じつさい、故事掌故にくわしいこと、それはそれで、ひとつの能力だった。彼らは、その博識さによって、当時たかく評価され、名声をえていた。六朝の正史をひもとくと、「博聞多識」「博跋涉該通」「博覽無所不知」「晝夜尋読、未嘗輟手」などのことばが、つねに褒辞として叙されている。日々読書して、前言往行をたくわえ、故事掌故にくわしい彼らは、ただ博識というだけで、尊敬されるにあたいしたのである。その意味で、王儉が陸澄を「書物の戸だな」と評したとき、おそらくは揶揄とともに、多少の嘆賞もふくまれていたのではないか。

現在の我われは、詩賦がつくれず、時務に役だたなかつた陸澄らを、なんとなく、顔延之や王儉などより下位の存在だとみなしやす。本稿もたぶん、そうした立場から論じてきた。ただよくかんがえてみると、陸澄のような読書や学問に専念してきた人びとを、ただ詩賦創作や時務ができなかつたというだけで、無能の役たたずな連中だとみなしてよいか、かなり疑問だとせねばならない。

当時の六朝貴族たちは、詩賦の創作や官位の栄達だけをめざして、いきていたわけでない。彼らは、詩賦だけでなく、この隸事や書、囲碁、絵画などでも、さかんに腕前をきそいあっていた（さらには、官位をもとめぬ清廉ぶりでも、無欲さをきそっていた）。そしていずれの方面であれ、卓越した能力をもった者は、人びとからもてはやされていたのである。とすれば、詩賦の創作のみ高みにおいて、他の学芸や技能をみくだすのは、我われ文学研究者の偏見なのかもしれない。当時の六朝貴族たちの心性や実態をあきらかにするためには、文学創作の業績だけでなく、より総合的にみつめてゆく必要があるであろう。

#### 注

- (1) 『駢文史序説』は隸事を「故事を使用すること」と説明するが、青木正児『支那文学概説』（全集第一巻三三四頁）には、「隸事とは故事を相隸属して文を作ることである」とある。ほほおなじ解説だが、厳密にいえば、前者は技法ととらえ、後者は技法＋作文と解していて、微妙に差があるようだ。
- (2) この陸澄の論議は、褚淵が逆の事例（左丞がうったえた事例）や、御史中丞が職務怠慢で免官された事例）があることを

論証したので、けっきょくやぶれてしまった。上には上のものしりがいたのだ。そのため陸澄は、庶民の身分におとされてしまったのである。

- (3) そういえば、『文選』に注釈をほどこした初唐の李善も、学識は博大だったものの、文才はふるわず、『書籠』（書物の入れもの）だと評されたという。とすれば、『書厨』（書物の戸だな）とよばれた陸澄も、この李善と同種のタイプの文人だったのだろう。この陸澄、詩文がだめだったとしても、抜群の学識を有していたのだから、隸事などに興じておらず、『李善のように』ひたすら書物の注釈に専念しておれば、文学史上でもっと名声を博していたかもしれない。

- (4) こうした江淹『恨賦』の修辭的技巧については、拙著『六朝の遊戯文学』第十九章を参照。

- (5) 文学創作において、もっとも根幹にあり、大切なことは、構想「こういふふうにつくろう」の段階よりも、もっとも前に存しているはずだ。それはなにか。心中で「これだ!」とおもいつくこと、つまり靈感（インスピレーション）、ひらめき、神来、天啓、着想など）をささかせることだろう。本稿では、「この靈感をささかつたあと、さてどうかいてゆくか」という想定で話をすすめた。そのため、肝腎の「靈感をささかす」段階にはふれなかったが、この重要な問題については、かつて拙著『六朝の遊戯文学』第十六章で論じたことがある。この靈感の問題に関心のあるかたは、これをお読みいただければさいわいである。